

平成艸紙



おりおりの記

忠犬ハチ公

公益財団法人 資本市場研究会
顧問

長岡 實

戦後生まれの日本人が総人口の約8割を占める時代である。8割のひとが知らない戦前の日本について、いくつか書き残しておきたい。

そのような意味では、最初の話「忠犬ハチ公」は必ずしも適当ではないかもしれない。待ち合わせの場所としてJR渋谷駅頭のハチ公の銅像はあまりにも有名だからである。ただ、私が書きたいのは生きているハチ公のことなのだ。

数年前、親しい顔ぶれのお酒の席で、私がハチ公の背中に乗ったことがあるという話をしたところ、「あの銅像は結構高いのに、あぶないなあ」と若いひとにいわれたが、私が乗ったのは生きたハチ公の背中だった。ハチ公は1923（大正12）年生まれの子秋田犬で昭和10年に12才で死んだ。いまの銅像は戦後1948（昭和23）年に建てられたもので、初代のものはまだ生きていた1934（昭和9）年に建てられた。飼主の上野英三郎東大教授が出先で突然死されたのに、それを知らないハチ公が御主人をお迎えに渋谷駅に通いつめたことが評判になり、「忠犬」と呼ばれるようになって、忠君愛国の当時の世相も反映して銅像となったので

ある。

小学校に入るとき渋谷に住んでいた私は、健康を害して、3年生のときに武蔵野の面影が残っていた高円寺へ引越し、電車通学になったので、渋谷駅でハチ公をよく見かけるようになった。当時としてはすでに老犬といってもよかったハチ公は、身体は大きくてもおとなしい犬だった。晩年は渋谷駅に住みついていたようで、駅員さんたちがよく面倒を見ていた。

ハチ公が渋谷駅に通いつめたことについては、いろいろの説があった。惰性に過ぎないだろうとか、駅前の夜見世の焼鳥屋の主人がかわいがって焼鳥を食べさせたからだろう、などという話も流れたが、私はあくまで「忠犬」説だった。電車通学の朝、小学生の私がひとに先きがけて駅の階段を駆け下りようとしたとき、階段の下に坐って見上げていたハチ公の姿を何回も見かけたからである。

同じ光景を見たという知人も何人かいた。何年経っても、階段の下で上を見ていたハチ公の姿は、私の心に深く刻みこまれている。